

福祉系 対人援助職養成の 現場から³²

西川 友理

〇〇さえなければ…

「どう？実習はどんな調子？」

福祉施設や幼稚園で実習中の学生のもとに指導に行き、こう問いかけると、以下の言葉が返ってきます。

「楽しいですよ！実習日誌さえ無かったらね。」

「子どもと一緒に居るのは楽しいんですけど、でも、実習日誌が…。」

「一日疲れて帰ってくるでしょ？その後、実習日誌の記録を書かなアカンとなるともう…気が滅入ります。」

実習日誌・実習記録指導担当の私は、いつも苦笑いです。

実習日誌や記録は何のために？

社会福祉士実習や保育実習などの実習に行く前の学生達に、実習記録の書き方を教えています。

教える内容は、記録の書式、観察した事実と頭で考えた考察を明確に分けること、自分の感情をどう処理して文章に落とし込むか、記録に適した言葉の使い方等、意外と多岐にわたります。

しかし、それらを教える前にまず専門職は記録を何のために書くのか、記録に残すことそのものの意味を考える時間を作るようにしています。

記録は、仕事をする上で、同僚との情報共有に使えます。職場の外部の関係機関・施設との連携にも欠かせません。また、自分自身の実践を振り返るのにも使えます。誰かからスーパーバイズやコンサルテーションを受ける際の資料になります。時には、何らかの研究の第一次資料として使われるかもしれません。極端な話ですが、何らかの訴訟が起こった際には、証拠にもなります。

記録を残す意味は何か。それは一言で言って、「積み重ねた記録は、後から必ず何かや誰かの役に立つから」です。

〇回目記念！

数年前から、社会福祉にまつわる仕事をする人たちの勉強会を定期的に開催しています。規模は小さく、場所もその都度変わりますが、40人程度のメーリングリストとロコミだけで、細々と実施

しています。

回数を重ねていくにつれ、何となくこの勉強会の文化が出来てきました。継続的に参加してくださる方もいらっしゃいます。主催である私の力が足りない部分については、参加者の皆様が補ってくださったり、困った時には誰からともなく問題解決につながるアイデアが出てきたり、それぞれのメンバーの、この会の中での役割分担が何となく出来たりと面白い集団力動も生まれてきます。

毎回、開始前には「うまくいくかしら」と緊張するのですが、なんとか毎回十数名の参加者が集まり、結構楽しく充実して学んでくださっているようです。

この勉強会の開催が先日、10回を超えました。これについて、もっと喜びや達成感があるかと思ったのですが、そうでもないのです。

もちろん、一所懸命に取り組んでいないというわけではありません。毎回毎回、実施後には様々な反省が残り、より良いものにするにはどうすればいいか考え、それなりに悩みつつ、なんとか開催しています。

ショッピングモールで「〇周年記念セール！」が開催されたり、テレビ番組で「記念すべき第〇回目の放送です！」というセリフを聞いたり、学生が「〇〇さんと付き合って〇年〇カ月記念♪」とSNSに書いたりするのを目にしていると、記念日や記念回というのは、もっと盛り上がる気分になるものなのだろうと思っていたのですが、全くそんなことはなく、ただ淡々と10回目を実施し、11回目も済んで、今12回目実施の準備をしています。

「今日一日」の積み重ね

アルコール依存症の自助グループである AA (アルコホリックアノニマス) には「One day at a time」、今日一日、という言葉があります。

薬物依存やアルコール依存の自助グループにいらっしゃる方と話をすると、「平成〇年〇月〇日から飲んでいない！」

という言い方をする方があまりいないと思います。それよりも、

「〇年〇カ月間、クリーン (お酒や薬物を使用しない状態) で過ごせています。」

という言い方をされる印象があります。

もっと言えば、もう絶対お酒を飲まない！とか、クスリに手を出さない！という感覚よりも「今日一日、クリーンな日を過ごす」事を重視していらっしゃるようです。

そして、クリーンな「今日一日」が少しずつ積み重なっていく、という日々を過ごしていらっしゃるようになります。

目の前にある同じものを、こつこつと積み重ね、ふと目を上げて振り返ると、思わぬ遠いところまで来ている。とりあえず1つ、とりあえず1回、とりあえず今日一日。

そうやって積み重なっていくものは、他者から見た時に、あるいは他者から見た時のように客観的に見た時に、強い説得力を感じます。

しかし、自分が「とりあえず1つ、と

りあえず1回、とりあえず今日一日」を続けている最中は、目の前しか見えません。

きちんと積み重ねていくという事は、こういう事なのかもしれないと感じつつあります。

積み重ねることそのものを 目標にしない

ところが、今日の前にあるものを積み重ねることそのもの、つまり継続することそのものを目標としてしまうと、とたんに何のために「それ」を行っていたのか、そもそもの目標を見失ってしまうように感じます。

何かが始まって、それがうまくまわりはじめると、出来ればそれは同じような形で続いてほしい、という気持ちが生まれます。状況が変わらない方が、ストレスや労力が少ないからです。

確かに物事が変化する時はどんな時でもストレスが大きく、変化することは怖さを伴います。しかし、何らかの流動性がないと物事は腐ってしまいます。

特にある組織や、ある事業、ある生活習慣がなくなるというのは大変大きな変化であり、周囲に与える影響も大きいでしょう。しかし、それがなくなる事で別の新しいものが生まれることは往々にしてあります。

経験、作品、回数、日数、期間、業績など、「何かを積み重ねる」ことを目標にすると、「何か」よりも「積み重ねる」ことに意味を持たせようとしてしまいがちです。そこには執着のようなものが

生まれ、自由度が制限されます。

それよりも、その「何か」の意味を大切にすることで、やがて気付けば「積み重なっている」という状態の方が、健康的な積み重なり方をする気がします。執着というより、成長があります。

「何か」の意味を大切にしていれば、「意味」を活かすためにそれまで行ってきた行動を大きく変えたり、時には一見「積み重なり」がなくなったように見えても、形を変えて不思議に意味が続いて行ったりと、その自由さを許容できるようになるのではないのでしょうか。

「何を大事にするか」 を中心に置くこと

数年前に『驚きの介護民俗学』という本を人から勧められて読んだのですが、これが大変面白かったのです。

著者は静岡県沼津市のデイサービス「すまいるほーむ」の管理者・生活相談員で、元大学准教授の六車由美さん。六車さんは民俗学がご専門で、2003年、33歳の時に著書『神、人を喰う―人身御供の民俗学―』で第25回サントリー学芸賞（思想・歴史部門）を受賞し、精力的に研究活動をされた方なのですが、ご自身の思うような働き方が出来ず、周囲の期待に応えきれないとお考えになり、大学を辞められました。いったん数か月間はひきこもった生活をされていたようですが、雇用保険の手続きにハローワークに訪れた際、ヘルパー2級の資格が取得できることを知り、資格を取得、翌年の2009年から特別養護老人ホーム

のヘルパーとして働き始めたとのこと。すると、介護現場で利用者が見せる仕草やのつぶやく言葉に大変興味を持たれ、やがてそれらを記録するようになりました。1年間かけて集めたその記録と、これにまつわる考察を本にされたものが『驚きの介護民俗学』です。

あまりに面白くて著者についてもっと知りたいと思い、インターネットで調べました。そして、すぐに六車さんのホームページを見つけました。その「研究テーマ」のコーナーにはこうありました。「…自然のなかで生きる人の営みについて考える。また、学生とともに民俗映像の制作を行うことを通して、若い世代が伝統や民俗にかかわっていくための新たな可能性を模索している。（中略）上記については、今後もテーマとして持ち続けるが、現在は、高齢者介護の現場にて、「介護民俗学」を提唱している。」

この一節を読んだ時、私は著書を読んだ時と同じ位、感動しました。

大学とデイサービス、活動している現場は昔と今では全然違いますが、六車さんの中では何も変わっていません。「人の営み」に対するリスペクトと「研究者であること」がずっと続いています。

「何か」の意味を「積み重ねる」とは、こういう事なのだと思います。

もともと私は、保育士等の対人援助職を目指す学生に対して、

「資格は目的じゃなくて、手段だと思うよ。『社会福祉士になりたい』『保育士になりたい』のは何を成したいためなのか、何を大事にしたいのか、という事を考えてみよう。多分そちらの方が目的

だと思うよ。目的を見据えたら、もしかしたら資格なんていらなないかもしれないよ。」

と、折に触れ伝えてきました。資格取得率を上げないといけない専門職の養成校教員としてはあまりいい言葉ではないのかもしれませんが、この六車さんの一節に出会って、ますます「どんなこととして生きていくにしろ、自分は何を大事にしたいのか、わかっていれば大丈夫」と、自信をもって学生に言えるようになりました。

「『大事にしたいこと』が大事に出来るって自分で分かっているなら、例えば…そうね、ブラジルで花屋になっても幸せやと思うで。」

と冗談のように言っています。

記録＝積み重ねの客観化

そして続いている何かを「記録」することは、その積み重ねに、他者に対する説得力を持たせます。淡々と積み重ねた結果は、冷静なデータになり、1つひとつ冷静に積み重ねたデータは、新しいシステムを作る時の手触りのある根拠になります。

たった2年間だけど…

保育者養成校の短期大学で働き始めた3年前から、私はこのような取り組みをしています。

まず1年生の最初に、

「どんな保育者になりたいか」

「そう思ったのはどんな体験があったためか」

「その体験からなぜそう感じたのか」

「それを満たすために、これから何をやる必要があると思うか」

という4つの質問が書いてある用紙を配布し、回答してもらいます。

1年生の7月頃、また同じ質問用紙に取り組みます。続いて、実習直前である1年生の12月、最初の2つの実習を経た2年生の6月、最後の実習を経て10月にも同じ質問用紙に回答します。そして卒業直前の1月にも同じように回答し、この時、今までの回答用紙全てを見返す時間を作ります。

「うわあ、最初の頃はこんな事を書いててんなあ！」

「あっ、これ実習でめっちゃへこんだ後やったからねえ、こう思っていたねえ…。」

「たった2年間やけど、考えて変わるもんなんやなあ…」

それぞれ自分の書いた記録を見返して、じっくり味わいます。そしてその場で、学生たちは半年後の社会人になった自分、あるいは進学する学生の場合は大学3年生の自分にあてて、手紙を書きます。

在学中の2年間、たった5回の取り組みですが、これを通して、学生が記録の意味と積み重ねの説得力に気付くきっかけになればと思っています。

積み重ねを記録する意味

今年、その取り組みをしていた時、あ

る学生が言いました。

「そうそう、記録と言えば…先生、A施設の実習中に見学させていただいた事例検討会、すごかったんですよ。」

「何かの出来事に対して、どんな時に何があったか、その後どうなったか、その時の子どものセリフや行動、職員の返した言葉や行動、そういうのを全部記録して、それをもとに皆で話し合っていたら…。」

「それがあると、ちゃんと子どもの行動の意味をみんなで振り返れて、しっかり考えることが出来て…」

「で、そういう事例検討会を、毎月やってらっしゃるんですって。」

「私、記録って面倒くさいなあと思って

いたんですけど。ていうか、いまでも実習日誌を書くのは正直しんどいんですけど、なんか、記録するっていうのは、それだけで支援そのものなんやなあって思いました。」

積み重ねた意味は、説得力を持ちます。

日々の授業が、そして学校生活が、学生にとって「保育者としての学び」という意味の積み重ねになるように、考えていきたいと思っています。

.....

六車由美のページ

<http://muguyumi.a.1a9.jp/>

六車由実『驚きの介護民俗学』（シリーズケアをひらく） 医学書院 2012年